

Title	チーフと政治参加の問題：『中二階のある家』をめぐって
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 16 p.133-p.149
Issue Date	1966-03-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80260">https://hdl.handle.net/11094/80260</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## チェーホフと政治参加の問題

——『中二階のある家』をめぐって——

武 藤 洋 二

### Чехов и вопрос участия в политике

Чехов жил тогда, когда первое пролетарское революционное движение в России испытывало свои «половинчатость, негодность и слабые стороны».

В произведениях Чехова отражаются страдания интеллигенции, искавшей формы участия в политике в период ребяческих ошибок революционного движения русского пролетариата. Это искание, у Чехова, есть политическая сторона вопроса, как честно жить в эпоху безвременья.

Интеллигенты прежде всего должны были бороться с такими типами человека, как герой рассказа «Крыжовник», который, будучи совсем равнодушен к социальным противоречиям, может чувствовать себя счастливо. Чехов изображал их в сопоставлении с такими интеллигентами, которые недовольны существующим строем. Можно сказать, что Чехов в известной степени симпатизировал интеллигентам, которые всегда критикуют существующий порядок, но только бездельничают из-за отсутствия возможности перейти к социальным действиям.

Критически относясь к их безделью и созерцательной жизни, Чехов все-таки нашел «хорошие цели» в их «болезни», называемой праздностью, тогда как он не мог видеть их у деятелей «малых дел».

Сопоставляя в рассказе «Дом с мезонином» два типа интеллигентов----пейзажиста, который не может и не хочет работать при существующем порядке, и Лиду, которая, невольно поддерживая его, занимается «малыми делами», Чехов не столько предпочитает позицию пейзажиста позиции Лиды, как указывают многие советские исследователи, сколько требует, чтобы из позиции пейзажиста вышло действие свободное от отрицательных качеств «малых дел».

Требованием действия проникнуты последние произведения Чехова, который умер

накануне революции 1905 г.

Чехов думал, что противоречие между отрицанием общественного строя, как корня зла, и бездельем исчезает только тогда, когда сам человек входит в рабочую жизнь и живет одной жизнью с народом.

В повести «Моя жизнь» Чехов изображал юношу, который, бросив свою семью, начал «новую рабочую жизнь» и занимался физическим трудом, «как ломовая лошадь». Работая «среди людей, для которых труд был обязателен и неизбежен», герой повести «избавился от всяких сомнений», связанных с сознанием, что он живет на счет других. В «Доме с мезонином» Чехов показал предыдущий этап этого.

Я, как японец, живущий среди общественных противоречий и всегда думающий о социальной роли, которую я должен играть, считаю поставленный Чеховым вопрос своим. Этим и отличается моя статейка от трудов советских исследователей, которые живут при социализме и рассматривают этот вопрос как уже прошедший.

Муто Йодзи

Октябрь 1965 г.

プロレタリア革命は、「自分の最初の試みの中途半ばさ、よわさ、くだらなさを、残酷なほど徹底的にあざける」<sup>(1)</sup>と、マルクスはかいた。

チエーホフの時代は、プロレタリア革命の最初の試みを経験していた。チエーホフの文学活動は、プロレタリア革命運動の「一切のあともどりが不可能となり、事情そのものが、

ここがロドスだ、ここでとべ！

ここにバラがある、ここでおどれ！

とさけぶ情勢がつくりだされる」<sup>(2)</sup>前夜で終わった。

チエーホフは、プロレタリア運動とつながっていなかったが、彼の文学には、プロレタリア革命運動の「中途半ばさ、よわさ、くだらなさ」の時代に、政治参加の方法をさがしもとめるインテリゲンチヤの苦闘が反映されている。

この苦闘は、狭い政治的意味をもたず、当座の戦術的方法の探索とは無関係であり、根本的には、いかに誠実に生きるかという問題の広い意味での政治的側面であった。だから、俗論がとねえるチエーホフの非政治主義などというしろものは、チエーホフの文学の偉大さの証明である。なぜなら、彼の政治的信念は、俗論の主張者が気がつかないほど、日常生活のすみずみに入りこんでいたからである。

チエーホフの政治は生活であった。生活の主要方向を決めるものとしての政治的態度は、チエーホフの場合、生活から傾向をとりさることによって生活を存在に変えてしまう俗物性への批判のなかで、かたちづくられた。

## (1) 俗 物 性

「ものを読むことのできる人間は皆、政府を憎んでいる」と、いわれるような政治的状況の下で、満足しているのは、現体制によって利益をえているか、あるいは、政治的に無感覚な人間である。社会的不合理のなかで、個人の幸福にひたれる人間としての俗物に対する批判が、もっともまとまった形でおこなわれたのが、短篇『すぐり』である。

俗物は、利己主義からきた政治的無関心によって、現実の矛盾に気づかずにいられるので、幸福である。しかし、この俗物性にささえられた幸福は、生活ではなく、利己主義であり、怠惰であり、善事をほどこさない坊主ぐらしである。幸福などはないし、又、あってはならない。『すぐり』のイヴァン・イヴァヌイチは、こう考えている。

「強い者のあつかましさと怠惰、弱い者の無知とあさましさ。まわりには、どうしようもない

貧しさ、きゅうくつさ、退化、泥酔、偽善、うそ…」<sup>(3)</sup>——これが現実である。

「ところが、どの家にも街路にも、静かさと平穏がある。町に住んでいる5万人のうちに、さげ声声をあげ、大声で憤がいくるものは、一人もいない」<sup>(4)</sup>——これが生活態度である。

ひどい現実とそれに対する沈黙——これが秩序であり、この秩序がある人々に必要である。なぜなら、「幸福な人は、ほかでもない、不幸な人が重荷をだまってせおっているから、都合がいいのであり、この沈黙がなければ、幸福はありえないだろう」<sup>(5)</sup>と、いうわけだからである。

幸福が他人の不幸によってはじめてなりたっている社会では、幸福な人間は、社会がどんな状態であろうが、まわりの人々がどんなに不幸であろうが、そんなことにおかまいなく自分が幸福だと感じることでできる人間にかぎられるのに、そのような人間は沢山いるのだ。「満足し、幸福な人が全くなんと沢山いるのだ。これはなんて圧倒的な力だ！」<sup>(6)</sup>と、イヴァン・イヴァヌイチはなげく。

彼は思う。圧倒的な沈黙の力をうちやぶらなければならない。「沈黙の秩序」を破かいしなければならない。満足してはいけない。満足とは、現存秩序を認め、その機構の不合理さの上にあぐらをかいて、自分だけが幸福にひたることだ。

イヴァン・イヴァヌイチはいう。

「安心してはいけません。自分をねむらせてしまってはなりません。若くて、強くて、元気な人間は、善いことをするのにあいてはいけません。幸福はありません。幸福はあってはならないのです。もし人生に意味や目的があるとしたら、この意味と目的は、決して私たちの幸福にあるものではありません。もっと理性にかなった偉大な何ものかのうちにあるのです。善いことをして下さいよ」<sup>(7)</sup>。

落着いて、沈黙して、満足している俗物とはちがって、社会的責任感をもち、自分だけの幸福を考えてすましていられない人間は、現存秩序に対する怒りと不満を感じている。『すぐり』の俗物批判は、このような人間を要求している。

社会的責任との関連のなかで自分を考えるインテリゲンチェたちは、この沈黙の秩序に徒わらず、社会の不合理とたたかおうとするが、その圧倒的な力は彼らの具体的な行動をはねかえしてしまう。ロシアのインテリゲンチェたちが、農民革命に対する信頼を失い、形成されつつあったプロレタリア階級の中に革命的勢力を見なかった頃の歴史的状況は、彼らの反体制的精神が社会的行動となってあらわれるのをさまたげた。現実の不合理の圧倒的な力と、行動の可能性の不在は、彼らの反体制的精神を、倦怠という社会に対する観念的な否定の形であらわした。この倦怠は、ロシアの社会現象になった。

チエーホフの作品にたびたび登場する、社会の矛盾を痛烈に批判し、誠実にものを考えるが、行動的でない主人公たちは、この倦怠にかかっていた。チエーホフは、反体制的精神のあらわれとしての、この倦怠を、俗物性と対比させながら、その意義を強調してきた。チエーホフは、この倦怠にかかっているインテリゲンチヤの生活の分析と検討を通じて、現実変革を通じる生活の方向をさぐろうとしていた。

## (2) 倦 怠

この倦怠にかかっている人間が、自分の立場をはっきりのべたのが、短篇『中二階のある家』である。

主人公の画家は、「自分の年から年中の無為の言訳をさがしている、のんきな人間」<sup>(8)</sup>だが、彼の無為には理由があった。

画家は、「私の生活は退屈だ」と自分でもいうように倦怠しているが、周囲のことに無関心になっている人間、社会現象に価値判断を放棄した人間ではない。村に病院をたてる話をリーダから聞いたとき、彼はこの問題に「生々しい興味」をもち、意見をのべる。

画家は、村に病院をたてる必要はない、と考える。彼はその訳を話す。

「私の考えでは、病院、学校、図書館、薬局は、今の状態のもとでは、ただ隷属化に奉仕するだけです」<sup>(9)</sup>。

もちろん、ここでは、「今の状態のもとでは」という点に力点がおかれている。「今の状態」とは、画家の表現によれば、「人民が大きなくさりにつながれている」状態である。

画家は、病院をたてることなどは、この大きなくさを強化するようなものだと考える。彼は、ささやかな社会活動家のリーダにいう。

「あなたは、彼ら（人民）を病院や学校で助けようとします。しかし、こんなことで、彼らをかきから解放することはできません。それどころか、より一層苦しめるだけです。なぜなら、彼らの生活に新手の偏見を加えながら、あなたは、彼らのものいりを増やすのです。彼らが、こゝやくや本のために郡会にお金をはらわなければならないこと、つまり、もっとひどく働かなければならないことは、いうまでもありません」<sup>(10)</sup>。

リーダは、近くに病院があったら、アンナという農婦はお産のために死ななかつたろうと言って、病院の必要性を説く。これに対して画家は次のように主張する。

「大切なのは、アンナがお産で死んだことではなくて、こういうアンナやマーヴラやペラゲー

やたちが、みんな、朝早くから暗くなるまで、えらい仕事をし、むりな労働で病気になり、一生、お腹をすかした子供や病気の子供のためにおびえ、一生、死ぬことや病気をおそれ、一生、医者がいよをし、早くから色あせ、早くからふけこみ、そして、汚れと悪臭のなかで死んでゆき、彼女らの子供たちが、大人になって、同じことをくりかえす、こういうふうは何百年がすぎ、何十億もの人々が、年がら年中びくびくしながら、ただ一きれのパンのために、畜生よりもひどいくらしをすること、これが重大なのです」<sup>(11)</sup>。

だから、「つらい肉体労働から人々を解放することが必要である」<sup>(12)</sup>と画家はいう。

一部の者につらい肉体労働が課せられて、精神的な生活をおくる余裕もなく、動物的なくらしをしている現状では、例えば、彼らに文字を教える前に、その労働のくびきから解放しなければならない、と画家は考える。これは、ロシヤの農民には文化ではなくて、文化にたずさわる時間をあたえること、つまり、搾取者をやしなうための過重な労働から彼らを解放することが先決問題である、と考えていた革命的民主主義者と同じ論理である。

「現在の状態」のままでは、手のほどこしようがない、すべての活動が無意味だ、とまで画家は考えている。だから、彼は働かない。

「そのような状態のもとでは、芸術家の生活は意味がないのです。彼に才能があれば、それだけ彼の役目は奇妙で、不可解なのです。実際、彼が、現存秩序を支持しながら、強欲できたならしい動物のなぐさみのために働いている、という結果になるからです。だから、わたしは、働きたくないのです。そして、これからも働かないでしょう」<sup>(13)</sup>。

画家の無為の理由はこれであった。彼の無為は信念にもとづいており、それは、活動したくないという怠惰ではなくて、彼の活動を封じてしまう現存秩序に対する抵抗である。それは、社会に対するサボタージュである。

このサボタージュとしての無為からくる倦怠は、多くの人にひろまることによって、社会的現象としての反体制的気分をかたちづくる。

アメリカの波止場人足で、独学の思想家エリック・ホフフェはかいている。

「ある社会で大衆運動を開始する機会が熟したかどうかを知るためにもっとも信頼できる指標は、おそらく、単調な倦怠のひろまることであろう。大衆運動が発生する直前の時期について書かれたものは、ほぼ例外なく倦怠感の高まりについて触れている。そして大衆運動はそのもっとも初期の段階では、被搾取者や被圧迫者の間よりも、倦怠者の間に多くの同調者と支持者を見出しているようである。大衆動乱を誘発しようと計画している者にとって、人民が倦怠の極に達しているという報告は、少なくとも人民が忍び難い経済的あるいは政治的弊害に苦しんでいるとい

う報告と同様な快報なのである」<sup>(14)</sup>。

インテリゲンチヤとしての画家の意識的な倦怠の背後に、ホッフアのいう、民衆の無意識的で単調な大いなる倦怠があった。無意識的な倦怠が意識的な倦怠の背景になっていた。チエーホフの作品では、全く非政治的な存在である俗物が、ホッフアのいう、無意識的な倦怠にかかっている。

これらの倦怠のひろがりには、ロシヤが、大規模な大衆運動をむかえる時期にあったこと、したがって、インテリゲンチヤが、自分自身に何らかの政治的態度を要求せざるをえない時期にあったことを意味している。

このような状況のなかで画家のとった立場に対して、チエーホフは、**一時的には無理のないもの**として、同感していた。

チエーホフは、1892年にスヴォーリンにあてて次のように書いた。

「われわれには目先の目的も、遠い目的もありません。われわれの心は球がころがるほど空っぽです。われわれには政策はありません。われわれは革命を信じません。神もありません。オバケもこわくありません。わたし個人は死ぬことも、めくらになることもこわくないのです。何ものぞまず、何にも希望をたくさず、何もこわくない人間は芸術家であることはできません。これが、病気なのかあるいはそうでないのか、名前などはどうでもいいのですが、しかし、正直に言って、われわれの状態は、どんずまりです。(中略)わたしの病気は、わたしのせいではありません。そしてわたしは自分を治療することができません。この病気は、われわれからかくされたよい目的をもっており、訳があってつかわされたのにちがいないからです。訳があるのです、訳があってそれは軽騎兵と一緒につかわされたのです」<sup>(15)</sup>。

「この病気」が、「よい目的」をもっているということは、「この病気」が、現状打開に向うことになる反体制的気分であることを意味する。

チエーホフは、『中二階のある家』のなかで「この病気」を、たんなる気分ではなくて、明確な政治意識につらぬかれた生活の姿勢としてえがきつつ、「よい目的」をさぐっていたのである。

「この病気」の「よい目的」は、病気が病気でなくなり、観念的な態度や心がまえの次元からぬけだして、具体的な行動に発展することのなかにある。

小さな社会事業にたずさわることによって自己満足しているリーダは、まさにこの点をつくのである。彼女は、画家の意見を、「自分が無関心であることの云訳」だときめつけ、「手をこまねいて坐っているわけにはいきません」とか、「ほんとうに何かしなければなりません」といっ



て、行動の必要性をもちだして、画家の理屈にたちむかう。

ここで、行動拒否という形をとったレジスタンスと、小さな奉仕によって社会改良をこころざす立場とに対する価値判断の問題がうまれる。

リーダに対する画家の批判は論理的に正しく見えるが、彼は、「何かしなければなりません」という彼女の挑戦にかつことができるだろうか。

「人民が大きなくさりにつながれている」「現在の状態」のもとで、どんな行動がなされていたのか、リーダたちの社会事業の内容はどんなものかを、しらべることによって、この問題を考えなければならない。

行動の内容と意味がわかれば、その行動を拒否する画家の態度のもつ意義も、自然とあきらかになるはずである。

### (3) 「小 さ な 事 業」

農民革命に対する期待をうしない、テロリズムによる政治活動の破たんを経験した、80～90年代のインテリゲンチァは、人民に小さな奉仕をすることによって現実を改善しようとした。『中二階のある家』のリーダは、この「小さな事業」の実行者だった。「小さな事業」については、『中二階のある家』の画家によって批判された、結果としての政治的意味のなかだけでなく、その出発点にも大きな問題があった。

インテリゲンチァが、「小さな事業」をする目的は何か。当人たちは、人民への奉仕をもちだす。しかし、チーホフは、彼らの行動と生活の具体的な分析を通じて、彼らの行動の真の出発点になっているものをあばきだした。

短篇『生活の倦怠』(1886年)のなかでは、医学などではでんで知らないはずの大佐夫人が、情夫だった医者から医学をききかじったのをさいわいに、百姓たちに医療奉仕をする。

彼女は、無為に苦しんでいる女地主だが、百姓に治療をほどこすことによって、生活の退屈さをわすれることができる。きたない百姓たちにつくすことが、どうして彼女になぐさめをあたえ、生活の倦怠を追いはらうのか。

それは、彼女が彼女の顔見知りの個々の百姓たちに奉仕しているのではなく、「人民」という集団に奉仕している、と考えているからである。

「理屈の上で彼女は、彼ら（百姓たち）のなかに、個々の人間でも、百姓でもなくて、何か抽象的なもの——人民ノを見たかった」<sup>16)</sup>。

この女の俗物にも、「聖なる人民」という概念があり、これが、彼女の行動にはりあいであた

え、このはりあい**が**彼女のうさをおいはらうのである。

彼女は、隣人に対する愛情から出発し、又、それにもとづいて行動しているわけではなく、抽象化された人民という観念的で神聖な存在に奉仕しているのである。

「だからこそ、彼女は彼らに対して異常なほどやさしくて、おずおずしており、まちがいをすると赤面した。そして診察のときは、いつも、罪ある女という様子をしていた」<sup>(17)</sup>。

彼女は、自分でつくりあげた抽象的な存在のおかげで、神聖で崇高な事業をしているという思いにひたることができた。

「病人がひどく苦しめば苦しむほど、その病気がきたならしく、いやなものであればあるほど、彼女には仕事がころよいものに思えた」<sup>(18)</sup>。

彼女は、「自分が、自己の使命の高みに立っているのだ」<sup>(19)</sup>と思われるような時も経験した。そして、これは無上の満足であった。

「彼女は自分の患者を崇拜した。彼女は、**これが自分の救い主だ**と、本能的に感じた」<sup>(20)</sup>。まさにこのようなさかさまごとの中に彼女の「小さな事業」の性格が要約されている。

彼女は、ありがたみのない百姓を神格化して、「人民」にしたてあげ、この手づくりの偶像をありがたがることによって、自分の魂を救ったのである。

彼女の「小さな事業」は、結局、彼女自身に対する事業であった。社会事業と個人意識との、このような関係は、チーホフによってたびたびとりあげられたが、これがもっともつきつめて追求された作品が、『妻』（1891年）である。

『妻』は、アソーリンという退職官吏の手記の形をとっている。

アソーリンは、『鉄道史』の著述にとりかかっているとき、飢きんが起っていることを知る。彼は、なぜか飢きんのことが気にかかり、仕事が身に入らず、いらいらする。

「いったいなぜわたしはこんなに不安なのだ。蛾が灯に引きつけられるように、わたしを飢えた人々の方え引きよせるのは、どんな力なのだろう。全くわたしは、彼らを知りもせず、理解もせず、一度もおめにかかったこともなく、愛してもいないのだ。この不安な気持は、一体どこからくるのだ」<sup>(21)</sup>。

『妻』という作品は、アソーリンのこの自問の追求である。

彼の妻は、これについて、次のように考えている。

「あなたが不安な気持でいることは、わたしにもわかります。でも、それは、飢きんとも同情とも無関係です。あなたが不安なのは、飢えた人たちが、**あなたなしでも**なんとかやってゆき、郡会やその他一般の救済者が**あなたの**指導を必要としていないからです」<sup>(22)</sup>。

アソーリンは、飢きんの心配ではなくて、飢きん救済事業が自分と無関係におこなわれることにいらいらしていたという妻の指摘も、一つの答である。その証拠に、飢きん救済をねがっているはずのアソーリンが、飢きん救済にのりだしている人々を、猛烈にやつける。アソーリンによれば、飢きん救済者たちは、「思想も、理想も、信仰も、人生の目的も、しっかりした主義もない連中で、彼らの人生の意味はそっくり金のなかにあるのだ。金、金、金！なのだ」<sup>(23)</sup>。

彼の考えでは、役所も飢きん救済の資格はない。「郡会や国家の肉まんじゅうに吸付いている役所は、なんでもいいもう一つ第三の肉まんじゅうに吸付こうとして、毎日、舌なめずりしている」<sup>(24)</sup> 有様だから、アソーリンには、役所に、飢きん救済の助力を求めるつもりはみじんもない。

郡会の医者は、「長年のあいだ毎日毎日、自分には**なにも**できはしないということを、身にしみてわかりながら、それでも、凍ったじゃがいもだけで命をつないでいる人たちから給料をもらっている」<sup>(25)</sup> ような人間なのだ。

結局、アソーリンの周囲には、飢きん救済事業に不適格な人間ばかりなので、「こんな連中をあてにできない」、ところが、「百姓たちを運命のままにほっておくこともできない」ので、「自分自身で百姓たちをまともな状態にしてやらなければならない」ということになる。「わたしは確信するのだが、わたし以外には、絶対にただの一人も、この郡には飢えた人々を助けるべき人間はいないのである」<sup>(26)</sup>と、アソーリンは断言する。

他人が飢きん救済にのりだすことは、この断言にさからうことになる。アソーリンは、飢えている人たちが苦しんでいるから、気をもんでいるのではなく、救済事業を独占できないから不安なのである。

妻のいうには、アソーリンは、「まるっきり冷たんで、おもいやりなどみじんもないくせに、自分の世話なしに切りぬけられるのがこわくて、人の不幸をやりすごすことができず、ちょっかいをだすような人間」<sup>(27)</sup> であり、「飢きんも人の不幸も、ただ自分のよこしまな、けちな根性を発散させるためにだけ存在するといった人間」<sup>(28)</sup> なのだ。

アソーリンのしようとした社会事業は、妻の意見では、「自分のよこしまな、けちな根性を発散させる」ためであった。

それでは、彼の「根性」が発散されたら、アソーリンは満足するだろうか。『生活の倦怠』の大佐夫人は満足した。しかし、インテリであるアソーリンには、「根性」が発散されるように、自分が救済事業を手中にぎってからも、不安がつきまとう。

彼は、妻から救済事業をよこどしたときにいう。「あれほどわたしに興味をいだかせ、不安

にさせた事業が、とうとう、わたしの手の中にあるのだ。わたしは、他人がしようともせず、できもしなかったことをやるのだ。わたしは、自分の義務をはたすのだ」<sup>(29)</sup>。

こうして彼の思うとおりになった。ところが、不安はあいかわらずなくなる。

「万事、わたしの思いどおりに、望みどおりに、いっているように見える。ところが、一体なぜ、不安が去らないのだろう。(中略)心が安まるどころか、誰れか知らない奴が、わたしの後に立って、ザラザラの手ひらでわたしの背中をなでたような気持がするのだ。何がわたしに不足だというのだ。援助の組織はたしか人の手にわたったのだし、飢えた人たちは満腹するだろうに――これ以上何が必要なのだ」<sup>(30)</sup>。

アソーリンのこのことばは、彼の不安の主な原因が、妻の解答以外の点にもあることを示している。妻の指摘は、彼の不安の一部をついただけなのだ。

アソーリンは、心の中で声をきく、『君ハ侍従ダッテ？ ソイツハオメデトウ。ダガ、ヤッパリ君ハ卑劣漢ダヨ』<sup>(31)</sup>。

彼はつぶやく、「たわごとだ。わたしが、自尊心や虚栄心でうごいているなんて、たわごとだ」<sup>(32)</sup>。

ところが、どうしたことか、彼は、このとき、古い詩の一行を思いだす

善人たることのなんと楽しき！

ここでアソーリンは、飢きんをきっかけとしてあらわれた不安の原因を、ぼんやりと自分でさぐりあてる。それは、飢えた人たちを助けようとする気持がないのに、救済事業を自分のものにしてしようとしている自分のすがたの確認である。それは、自分が、結局は、卑劣漢であり、利己心と名誉心にあやつられていないか、飢えた人民を救うことではなくて、「善人たることのなんと楽しき！」という詩句に要約される自己満足が、自分の行動の目的であり動機ではなかったか、という自覚めいた疑問である。アソーリンは、このとき、自分に対する妻の批判があたっているままで考えるようになっている。

「わたしは、わたしの良心がなにを望んでいるのか、分らなかった。妻は、女らしくではあるが、明確に、まるで通訳のように、わたしの不安の意味をときあかしてくれた。ひどい不安を感じているとき、わたしは、すべての秘密は、飢えた人にあるのではなくて、わたしが、かくあるべき人間でなかった点にあるのだと、以前にも何度も思いあたったことがあるのだ」<sup>(33)</sup>。

その後、彼は、飢きんで苦しんでいるはずの農民たちが、予想に反して、元気であることをみた。アソーリンは、ほほえんでいる百姓をみていう。

「この人たちをうちまかすような災難などはないんだ、ということが今わかった。わたしに

は、大気が、すでに勝利のかおりをおびているように、思えた。わたしは誇らしくなり、**わたしも彼らと一緒にだ**、とさけぼうとした」<sup>(34)</sup>。ところが、彼は、とつぜん、自分が全くのけものにされている、と感じる。

「人民の事業をやりとげた百万の人の群から、生活そのものが、わたしを、不必要で、無能で、悪い人間として、おっぼりだしたのだ。わたしは、邪魔者で、人民の災難の一部なのだ。わたしは負かされ、すてられたのだ」<sup>(35)</sup>。

アソーリンは、**自分の手をわずらわさないで、人民が元気になっているのを見て、自分を敗残者だと感じた**。

「わたしも彼らと一緒にだ」とさけぼうと身がまえたと同時に、彼は、**自分が彼らを元気にした**のでないことに気づいたので、彼は、あわてて連帯の手をひっこめたのである。人民に、自分に対する恩義を感じさせないで、あるいは、自分が人民に貸があると感じないで、かけねなしに人民にむかうと、彼は、ひけめを感じ、いじけてしまうのだ。

人民に対するひけめと強いエリート意識とのバランスの上につかっていた「よこしまな、けちな根性」は、発散の機会と場を失った。

アソーリンは、今、自分が「邪魔者であり、人民の災難の一部」であるとまで感じているが、これは、反省ではない。これは、他人から区別された自分が発揮されなければ、すでに敗北であると感じるエリート意識の裏返しの証明である。

アソーリンの不安を生みだし、育てたのは、このエリート意識なのだ。

アソーリンの行動は、自分の「けちな根性」から出発し、この「根性」が、自からいじけて、しぼんでしまうまで、続いた。彼は、結局、飢きんを前にして一人ずもうを取っただけだが、飢きんは、彼にとって、無だにはならなかった。彼は、飢きんをきっかけとして、妻・友人・郡会医から批判され、自分がどんな人間であるかを指摘され、彼自身も自分のすがたを見ることができた。飢きんは、彼に彼自身を、あばいてみせたのだ。

インテリゲンチヤであるアソーリンは、あばかれた自分と一緒にいるわけにはいかない。彼は、気分の上だけでも、別人になったように思う。

「今日までの自分が、わたしには、まるでもう他人のようだ」<sup>(36)</sup>。

彼は妻にいう。

「今までのわたしから、わたしは、ぞっとして跳びのき、ぞっとする思いで、それを軽べつし、恥ぢているのです」<sup>(37)</sup>。

彼は、妻以外に近かしい人間はいないこと、いつもしたってきたこと、頑固な自尊心がこれを

いうのをさまたげてきたこと、を告白し、自分の全財産をとりあげて、召使にしてくれと、不仲の妻にたのむ。「きのうから彼のなかにいる新しい人間」は、妻との冷戦のなかではりあった「根性」すらすてたのである。

「よこしまな、けちな根性」をもった古い自分をすてさったアソーリンは、「気がおちついた、まんぞくだ」という。

アソーリンの手記の結びの部分は、**新しいアソーリン**が、どのような人間なのかを語ってくれる。

「一時間後、わたしはもう机にむかい『鉄道史』をかいていた。飢えた人々も、わたしがこれをするのをさまたげなかった。今ではもう、わたしは、不安を感じていない。ついこのあいだ、妻とソーポリとつれだって、ペストローヴォにある農家を見まわったとき目にした無秩序も、不吉なうわさも、まわりにいる人たちのしでかす落度も、わたしのせまりくる老年も、なにひとつ、わたしを不安にさせない。戦場で飛びかう砲弾や鉄砲玉が兵隊たちの身の上話や食事やくつの修理のさまたげにならないように、飢えた人たちは、わたしが安らかにねむり、わたし個人の仕事をするさまたげにならない。わたしの家のなかにも、敷地内にも、そして、ぐるり一帯はるか遠くまで、ソーポリ医師が『慈善的らんちき騒ぎ』となづけた仕事、わきかえっている。妻はちょくちょくわたしのところえやって来て、まるで、『自分の生活の言訳をみつけるために』飢えた人たちにもっとやるものはないか、とさがしているように、心配顔でわたしの部屋をながめまわす。彼女のおかげで、まもなくわたしたちの財産が残らずなくなってしまう、わたしたちは貧乏になるだろう、ということはわかっている。しかし、これもわたしを不安にさせない。わたしは、彼女にほがらかにほえんでやる。この先なにがあるのか、わたしは知らない」<sup>(38)</sup>。

自分以外の人間が、飢きんを救うのではないかと、いらいらしていたアソーリンは、今では、自分のまわりに「慈善的らんちき騒ぎ」がわきかえっていても、平気である。飢きんではなくて、自分自身にふりまわされていたアソーリンは、こうして、過去の自分だけでなく、自分全部をすてることによって、「何ごとにも心をみだされない」人間になった。彼は、人民の事業からみれば、困った存在であったが、今では、問題外の実在になった。社会的なことがらに不安を感じる自分から「跳びのいた」アソーリンは、同時に社会から埋没した。

アソーリンは、自己意識と政治意識との矛盾地獄からぬけだして、安らかにねむれる非政治性の中へ、しけこんだ。

アソーリンにも、「小さな事業」にたずさわる大佐夫人にも、共通していることは、「小さな事業」が、結果的には自分たち自身の救済のためであり、彼ら流に抽象化された人民への「奉

仕」や使命感によって、自分が息をふきかえそうとしたり、お利口さんになろうとしたことである。

このことは、彼らが決して革命勢力でなかったばかりか、アソーリン自身がいうように、「邪魔者であり、人民の災難の一部」であったことを、はっきりと証明している。

『中二階のある家』の画家の無為に挑戦したリーダーたちの「事業」は、大佐夫人やアソーリンの、このような、かっこ付きの政治参加と共通した性格をもっていた。

このような態度や行動と、画家の反体制的精神とが比較されるとき、後者のとっている姿勢がやむをえないものに思えてくる。ここで二つの立場に最終的な判断をくだすべきだとも思える。

しかし、結論をだすまえに、もう一つ明らかにすべき点がある。これら二つの立場に価値判断をくだすためには、どちらが、人民にどのような実際の効果をもたらすかという、きわめて実務的な観点から、二つの立場に対する分析をしめくくらなければならない。

#### (4) 人民に対する実際の効果

アソーリンの妻も、飢きん救済事業にたずさわっていたが、彼女は、はじめから、これは自分自身のためだとわりきっていた。夫と不仲で、おなじ家にすみながら他人同然の生活をし、しかも物質的には夫に完全に依存している彼女は、飢きん救済の仕事によって、自分が生きていることを確認しようとした。

彼女は、飢きん救済事業が、自分にとって何であるかを、はっきりという。

「これはわたしの人生に残っているすべてです。今までわたしにはなにもありませんでした。(中略)今、これにすがりついて生き返ったのです。幸福です。これによって自分の生活の言訳を見つけたような気がします」<sup>(39)</sup>。

アソーリンは、「けちな根性を発散させる」ために、彼女は、けちな生活の言訳を見つけるために、大佐夫人は、うさばらしに、社会事業にしがみついていた。

自己意識に支配されるこのような行為について、『妻』のなかで、もっとも地道な活動家であるソーボリ医師が次のようにいう。「われわれの人民に対する関係が、孤児院や廃兵院にみられるような、ありきたりの慈善の性質をおびているあいだは、われわれは、ずるくかまえ、ごまかし、自分をあざむくだけで、それ以上なにもないのです。われわれの関係は、実務的で、そして、計算と知識と正義とにもとづいたものでなければなりません。(中略)ところでわれわれは、一日に350ルーブリではなくて、たった10ルーブリ出して、やれ扶助だとか援助だとか、これで

あなたの奥さんもわれわれみんなも、とてつもないすばらしい人間だとか、人道主義万才だとか、いっているんです。こういう事情なんですよ、あなた。ああ、もしわれわれが人道についてのおしゃべりをへらし、もうちょっとよけいに、計算をし、判断をし、自分の義務に良心的にあたるようになったら、いいんですがねえ」<sup>(40)</sup>。

ここでは、インテリゲンチァの政治参加の人民に対する実際的効果がとわれている。個人的な事情にもとづく出発点が拒否されている。行動する人間と対象とのあいだに介在する不純なものをとりさり、人民にかけねのない態度であたらなければならない。社会事業は、人道的な行動をしたという点ではなくて、どれだけの実際的効果をもたらしたか、という点で評価されなければならない。

短篇『生活の倦怠』のなかで、医学の知識なしに医療奉仕をしている大佐夫人に、彼女の夫はいった。

「お前が自分で治療をはじめると、病人をつっけんどんに医者のおしえ追いやった方が、病人にはるかに大きな利益をもたらすことになるのだ」<sup>(41)</sup>。

自分にはなぐさめと喜びを、人民には不利益とめいわくをあたえる、このような慈善事業あるいは人民をだしにした自己救済が否定されなければならない。ソーボリ医師の要求する実務的性格と計算とは、なによりもまず、このようなあべこべの関係をなくすことを意味している。

80～90年代のインテリゲンチァは、60年代の革命精神のぬけがらをきて、奇妙で抽象的な聖なる人民という意識をもちつづけ、これがエリート意識とまじりあい、「小さな事業」にあらわれた。この「小さな事業」は、人民に対する実際的効果という根本的な面で、全く人民の事業にあたいしないものであることが確認された。チエーホフは、このような「60年代のきれいばし」よりも、『中二階のある家』の画家の生活態度の中に、「よい目的」をかぎつけようとした。

しかし、画家の無為は、「小さな事業」のような否定面をもたないが、きわめて重大な危険性をもっていた。

「小さな事業」は、部分的な補修によって、矛盾の根源である制度そのものを擁護するのに反して、反体制的精神のあらわれとしての画家の無為は、制度そのものの全面的否定である点で、きわだった違いがある。しかし、画家の態度は人民にどんな実際的な効果をもたらすか、と問われたとき、それは人民になにも与えないことがわかる。それは、画家の個人的な態度であり、画家が**自己を主張し通す方法**にすぎなかった。画家は、自分一人の誠実さをまもり通した。人民から見た場合、これは画家の個人的な事情にぞくすることであり、その誠実さは、**人民にとっては**、彼が制度悪に加担しなかったという点でのみ、意味があった。しかし、これは人民には通じない。過重な労働にたずさわっている人民——朝早くから暗くなるまでえらい仕事をし、無理な



労働で病気になるアンナやマーヴラやペラゲーヤたち——にとっては、画家は、誠実で観念的な反抗者でも自分たちの同情者でもなくて、なまけものの寄生者にすぎないのだ。

精神において、きわめて対照的であるのに、「小さな事業」も画家の態度も、個人的な次元を出ず、人民に滲透しない点で、共通している。

画家の姿勢は、人民に対する実際の効果の上では無であり、それは、人民からの孤立という危険性を持ち、そのなやみと苦悶は一人ずつである。

「小さな事業」と画家の立場との比較からどのような結論が出されるかはすでにあきらかである。「小さな事業」よりも画家の態度の方がましであるということではなくて、反体制精神の上になった行動が必要であること、及び、行動と生活、政治意識と生活との統一が必要であることが、結論である。

チエーホフは、アソーリンの行為が、彼のかけねのない生活から生れたものではなくて、自己意識から出たものであるために、俗物の政治的無関心と紙一重の差であることを、アソーリンの破滅をとうして示した。生活とはなれている政治行動、自分の生活の基ばんと結びついていない社会活動の弱さ、偽善、危険性を確認することによって、チエーホフは、自分自身が労働にたずさわることの中に自分の生活の基ばんをおきながら人民との連帯に入っていく人間を、主人公にした作品『わたしの生活』へと進んでいくのである。

1965年9月

## 註

- ① マルクス 伊藤・北条訳 『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』 岩波文庫 22ページ。
- ② 同上 23ページ参照。
- ③④ Чехов. собрание сочинений в 12 томах. Гослитиздат, М. 1954—1958гг. том8, стр. 306
- ⑤ 同上 306～307ページ。
- ⑥ 同上 306ページ。
- ⑦ 同上 308ページ。
- ⑧ 同上 95ページ。
- ⑨ 同上 99ページ。
- ⑩⑪ 同上 100ページ。
- ⑫ 同上 101ページ。
- ⑬ 同上 103ページ。
- ⑭ エリック・ホッファー 高根正昭訳 『大衆』 紀伊国屋書店 昭和36年 59ページ。
- ⑮ Чехов том11 стр. 601
- ⑯⑰⑱⑲ Чехов том4 стр. 274 (強調は引用者)。
- ⑳ Чехов том7 стр.22
- ㉑ 同上 26ページ。(強調は引用者)。
- ㉒ 同上 35ページ。

- ㉔ 同上 7 ページ。
- ㉕ 同上 6 ページ。
- ㉖ 同上 7 ページ。
- ㉗㉘ 同上 15 ページ。
- ㉙ 同上 29～30 ページ。
- ㉚㉛㉜ 同上 30 ページ。
- ㉝ 同上 34 ページ。
- ㉞㉟ 同上 37 ページ。(強調は引用者)。
- ㊱ 同上 47 ページ。
- ㊲ 同上 49 ページ。
- ㊳ 同上 50 ページ。
- ㊴ 同上 34 ページ。
- ㊵ 同上 48 ページ。
- ㊶ Чехов том4 стр.282